

# 女子学生のための一冊

～女が女として「学ぶ」とはどういうことかを考える～

はなうす 渡辺淳一著 『花埋み』 新潮文庫

『涙 壺』など初期の短編を除いて、私は渡辺淳一の恋愛小説を、世間やマスコミが騒ぎ立てる程には評価していない。渡辺の真骨頂は評伝文学にこそあると思う。自伝的小説である『阿寒に果つ』『白夜』、野口英世の生涯を描いた『遠き落日』、歌人中条ふみ子の生涯を描いた『冬の花火』、日本初の献体を志願した女性を描いた『白き旅立ち』、…。

中でも『花埋み』は、日本の女医第一号である荻野吟子の生涯を描いた作品である。夫に性病をうつされた吟子は、同じ苦しみにあえぐ女性を救うべく女医を志す。しかし当時、「女に学問はいらぬ」とされ、彼女が医師になる過程で受けた数々の仕打ちが、現在のセクハラなど比較にならないくらいひどいものであった。つい百年前まで、女は大学で学ぶ自由を全く持てなかったのである。

私が皆さんに訴えたいのは、今こうして学べる自由に感謝して欲しいということだ。それは直接には、学費を負担しているご両親に、であろう。しかし、大学生となっ



た君たちはそれだけでは足りない。自らに連なる人々へのまなざしを持つて欲しいのだ。荻野吟子はかりではない、津田梅子ら女子教育に心血をそそぎ、生涯を捧げた人々がいればこそ、皆さんの今日があるのである。そしてまた高崎経済大学を創り、支えてきた方々がいればこそ、皆さんは学べるのである。質（た）したいのは、これ程までにお膳立てをしてもらいながら、どうしてもつとつと学ぼうとしないのか、ということだ。

吟子の生涯とその語られた言葉を知り、皆さんが勉学に励まれんことを切望する。君たちへの心からのエールとして、この書を強く推薦したい。



## 高松 正毅 (たかまつ・まさき)

経済学部助教授。

1995年早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程退学。専門は、国語学・言語学。担当科目は、日本語概説、日本語研究、文章表現Ⅰ・Ⅱ、論文作法Ⅰ・Ⅱ。授業との関連から作文理論と作文の上達訓練法を研究中。「書きたいことがなければ、文章は書けない。書きたいことは知ることによって生まれ、考えることによって深められ、組み立てられる。」が持論。